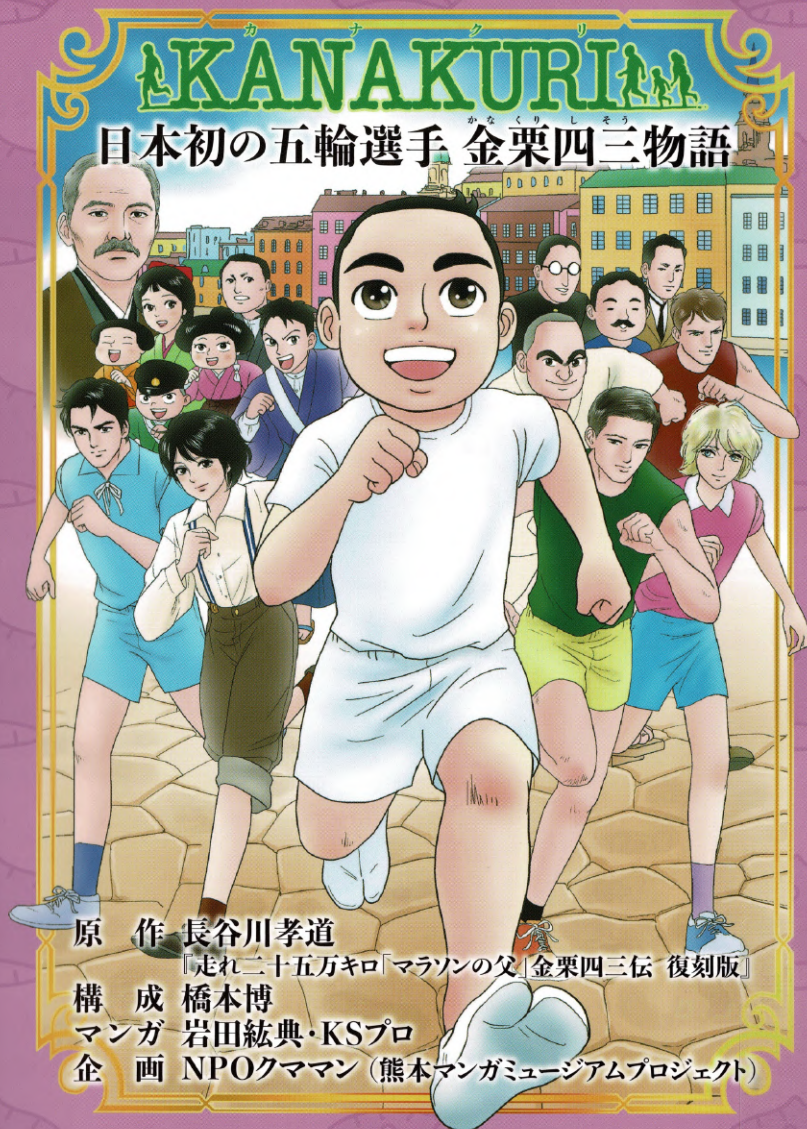




豊かな森の道を走る 彼が見た景色はどんなだったろう
道端に咲く小さな花に目を止め 微笑んだろうか
軽やかに歌いながら 遠い空に夢を見ただろうか
走るとは 広い世界と関わっていくということ
思い切つて外へ飛び出してみれば
人々や自然が 自分をはぐくみ
包んでくれていることを実感できる
孤独や不安はどこにあるだろうか 自分の心の中以外に
だから僕も走り続けたい 今日明日もこの道を

岩田紘典



熊本日日新聞社

カ ナ ク リ KANAKURI

日本初の五輪選手 金栗四三物語

原 作 長谷川孝道
『走れ二十五万キロ「マラソンの父」
金栗四三伝 復刻版』

構 成 橋本博

マンガ 岩田紘典・KSプロ

企 画 NPOクママン
(熊本マンガミュージアムプロジェクト)

熊本日日新聞社

刊行に寄せて

熊本が生んだマラソンの父、故金栗四三さんを描いた漫画「KANAKURI(カナクリ)」は、熊日にとってチャレンジでした。新聞に毎日掲載される4コマ漫画ではなく、紙面全体を使った、オリジナルの連載漫画に取り組むのは初めてだったからです。

金栗さんに関しては、熊日OB長谷川孝道さんの『走れ二十五キロ』マラソンの父「金栗四三伝 復刻版」という名著があり、原作としては申し分ありません。問題は経験したことがない漫画の制作でした。

地方紙の熊日が取り組む作品なのだから、描き手もぜひ地元の人材でやりたい。その思いを合志マンガミュージアム館長の橋本博さん、崇城大芸術学部マンガ表現コース非常勤講師の岩田紘典さんがしっかりと受け止めてくださったことで、企画実現ができませんでした。岩田さん自身も連載漫画は初めて。崇城大の学生チームのサポートが何よりの味方になりました。

出来上がった金栗さんのキャラクターは、親しみやすさという点で予想を超えたものでした。従来のイメージを打ち破って超えてくれたのは、やはり漫画の持つ力だと改めて思いました。

親しみやすいキャラクターをきっかけに、金栗さんという人物のさらなる周知、理解につながることを期待します。

大河ドラマ「いだてん」は金栗さんが主人公。この本がドラマとも相まって、金栗さんの地元玉名市、和水町、南関町をはじめとする熊本の元気づくりの起爆剤になることを願ってやみません。

2018年12月

熊本日日新聞社編集局長 荒木正博

2017年11月22日、私が館長をつとめる合志マンガミュージアムに熊本日日新聞社の編集局長と編集本部長が訪ねてくれた。

「熊日でマンガの連載を始めます。テーマは金栗四三物語、大河ドラマ『いだてん』の放送予定に合わせて、2018年4月から12月までの毎週土曜日、新聞紙面の3分の2を使って毎回6ページ、月24ページで9カ月間の連載をお願いできないでしょうか。年末には単行本も出します」。

これには驚いてしまった。「熊本で圧倒的なシェアを誇る地元紙が、毎週紙面をいっぱい使ってマンガの連載？ おまけに本まで出すとは……。何という無謀な、いや大胆な提案を、しかも編集局長直々にされるのか……」というのが正直な感想だった。

「2015年に橋本さんが原案を書かれた『カタルバの樹 合志義塾ものがたり』は、作画力、構成力が大変素晴らしいということで、熊日出版文化賞を受賞されましたね。あの作品、素晴らしいかったです」。ここまで言われると、もう断れない。本来なら、とても身に余るお申し出である。それに個人的にも金栗さんとは不思議な縁があるのだ。

私の父は玉名の出身で、その兄、つまり私の叔父にあたる橋本二郎は玉名市の初代市長だった。彼は市長在任中に、初となる名誉市民の称号を金栗さんに授与したことで知られている。巡り巡って、甥の私に、金栗さんの人生をマンガにする話があるとは……。これも偶然ではなく必然だったのかもしれない。ありがたうお受けすることにした。

そこから具体的な打ち合わせが始まり、次のように方針を決めた。①原作は長谷川孝道氏（元熊日記記者）の書いた『走れ25万キロ』「マラソンの父」金栗四三伝」とするが、必ずしも原作本通りにマンガ化することを必要とするものではない。②生まれ故郷の玉名の話を、マンガではたっぷり盛り込む。③作画者は、若くてこれから期待される人を探す！。

そこで、作画者は現在崇城大学芸術学部のマンガ表現コースで非常勤講師を務めている岩田紘典氏に決めた。学生たちにも作画に関わるチャンスを与えることができるからだ。次にストーリーについて、マンガではいかに作品を面白いものにするかが問われる。今回は史実をベースにするが、あくまで創作部分が決め手になると考え、新聞社スタッフ、作画者と一緒に打ち合わせを重ねた。

「ストーリーに幅を持たせるために、実際には存在しない女性を登場させ、彼女を通して金栗の成長物語にしていく。ひたすら走り、誠実に純粋な心を見失わず、ひたむきに生きることを教えてくれた魅力的な女性をストーリーの柱にする」。ついに大まかなストーリーが決まった。

そこで、特に若い頃の金栗に焦点を当てることにした。走るために必要なことは、「基礎体力をつけること」「決して諦めないという気持ちを持つこと」、そして「ひたむきに練習を続けること」だと、言い続けた金栗。それは人生そのものにも言えることである。「体力、気力、努力」という、金栗三原則が生み出されたのは、この少年、青年時代があればこそであった。

彼の功績は、日本初のオリンピック選手であり、その後何度もオリンピックに挑戦し続けたということばかりではない。むしろその後の人生にこそ、学ぶことがある。そして、その原点は彼が過ごした玉名時代にあった――それこそマンガで一番伝えようと思った。

これで金栗の青春時代の話は終わりだ。金栗の人生全体にも関心を持つてもらえたなら、ぜひ、原作本『走れ25万キロ』「マラソンの父」金栗四三伝（長谷川孝道著 熊日出版）を読んで「カナクリズム」を堪能してほしい。